

北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会の概要

- 1 日 時：平成24年5月25日（金）13：00～15：45
- 2 場 所：北海道大学学術交流館第1会議室
- 3 出席者：別添出席者名簿のとおり
- 4 挨拶：道農政部生産技術担当局長より挨拶
- 5 検討会設置要領について

道農政部農産振興課より、「北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会設置要領（案）」の内容を説明し、構成員から承認を得たため、平成24年5月25日付けで本検討会の設置を決定。

- 6 座長選出：互選により道農政部農産振興課長を座長として選出。
- 7 議 題

○ 生食・加工用検討会（13：00～14：45）

- （1）シストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大の意義について
農産振興課より資料1、参考1、2を説明
- （2）シストセンチュウ抵抗性品種の紹介及び開発状況について（研究機関より）
試験研究機関の構成員より資料2を説明。
- （3）シストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大に関する課題の整理について
農産振興課より資料3、4を説明
- （4）意見交換
別添のとおり

○ でん粉用検討会（14：50～15：45）

- （1）シストセンチュウ抵抗性品種の紹介及び開発状況について（研究機関より）
試験研究機関の構成員より資料2を説明。
- （2）シストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大に関する課題の整理について
農産振興課より資料3、4を説明
- （3）意見交換
別添のとおり

出席者名簿

<生産者団体>

氏名	所属・役職等
鈴木 昭寿	北海道農業協同組合中央会 畑作農業課 主幹
藤井 正樹	ホクレン農業協同組合連合会 種苗課 課長
河原 憲生	ホクレン農業協同組合連合会 玉ねぎ馬鈴しょ課 課長補佐 ※下出雅佳玉ねぎ馬鈴しょ課長の代理出席
山本 開造	ホクレン農業協同組合連合会 でん粉課 課長
上田 裕之	十勝農業協同組合連合会 農産課 課長
藤谷 哲雄	上川生産農業協同組合連合会 農産課 課長
仲野 貴之	士幌町農業協同組合 農産部農産課 課長
須藤 昌彦	芽室町農業協同組合 農畜産部 次長
大西 貢	ようてい農業協同組合 営農推進課 課長
小野 丈夫	斜里町農業協同組合 営農部 部長
上野 隆	小清水町農業協同組合 営農部 部長

<試験研究機関>

田宮 誠司	独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター 畑作研究領域 上席研究員
江部 成彦	地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 北見農業試験場 主査（馬鈴しょ）
北 智幸	ホクレン農業協同組合連合会 農業総合研究所 作物生産研究室 次長

<関連団体・企業>

田島 和幸	独立行政法人 種苗管理センター 北海道中央農場 農場長
井上 善幸	財団法人 日本特産農作物種苗協会 十勝特産種苗センター 農場長
福田 智史	一般社団法人 北海道消費者協会 商品テストグループ技師
虎谷 利一	北海道スーパーマーケット協会 事務局長
古屋 幸生	生活協同組合コープさっぽろ 商品開発室 ※松井正広商品本部農産部バイヤーの代理出席
植村 弘之	日本スナック・シリアルフーズ協会 カルビーポテト株式会社 馬鈴薯研究所 所長
久郷 真司	サンマルコ食品株式会社 商品部 次長
小山 雅裕	社団法人 北海道馬鈴しょ生産安定基金協会 事務局長

<行政>

花岡 正博	北海道農政部 生産技術担当局長
今井 聡裕	北海道農政部食の安全推進局農産振興課 課長
内藤 晋介	北海道農政部食の安全推進局農産振興課 主幹（畑作企画）
河野 勉	北海道農政部食の安全推進局食品政策課 主幹（有機農業）
千崎 利彦	北海道農政部食の安全推進局技術普及課 主幹（研究連携）

<オブザーバー>

富樫 英二	農林水産省北海道農政事務所 農政推進課 事業第2係長 ※土橋勝農政推進課課長補佐の代理出席
-------	--

北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会（生食・加工用）の結果概要

1 日 時：平成24年5月25日（金）13：00～14：45

2 場 所：北海道大学学术交流館第1会議室

3 意見交換（主な発言内容）

○ 加工団体・企業

- ・ 北海道産の「男爵薯」ということで、コロッケの原料に使っている。
- ・ 他は、馬鈴しょであれば品種、産地にこだわらないところもあるので、そういうところ（加工業者）では、色々な品種を使っていくのは可能と思う。ただ、品質にバラツキがあると加工用では困るので、ある程度、加工特性の安定しているものが必要である。
- ・ 当方は「男爵薯」に特化してやっているのですが、今後も品種にこだわりたいところがあり、一品種で大量に確保できる方がコロッケとしては売りやすい。その点で、品種、産地にこだわらない所と差別化をしている。

○ 加工団体・企業

- ・ ある程度大きな規模で試験的に生産して、大規模な製品試験を行わなければ、本当の生産性や貯蔵性、加工適性、商品適性がわからない。それらを踏まえて、品種になる前にこの様な試験を行えるような試験体制を整えるべき。

○ 流通団体・企業

- ・ これだけたくさんの品種があるのにPR不足である。マスコミ等に取り上げてもらい上手にPRすることが必要。
- ・ 大手スーパーのバイヤーに馬鈴しょの新品種について聞いてみたが、知らないという答えが多い。
- ・ 市場関係者は「男爵薯」、「メイクイン」しか受け入れないとの意見が資料の中にあっただが、流通団体・企業で勉強会を開いているので、そういう所に積極的に出向いてPRを行えば良いと思うし、シストセンチュウの話がすれば、理解されていくと思う。
- ・ 貯蔵方法によって、甘みを増す品種もあるが、そのような馬鈴しょを我々は欲しているため、もっと宣伝をしてほしい。

○ 関係団体

- ・ シストセンチュウ抵抗性品種といった場合、虫が付いているのではないとの説明は重要だが、「抵抗性」ということを気にする消費者もいる。「感受性」とか「抵抗性」という性質は食の安全上問題がないことなどを合わせて説明してほしい。
- ・ 消費者が色々な品種を知るのは良いこと。しかし、「男爵薯」、「メイクイン」に代わるわかりやすい説明が必要。

- 流通団体・企業
 - ・ 流通の面からは、「男爵薯」、「メイクイン」のような主要品種に比べると新品種のロットの確保は難しいが、お客さんには新しい品種に抵抗感はない。
 - ・ 販売面では、まずは、買ってもらう事が大事で、徐々に認知してもらうしかない。一気に切り替わることにはならない。
 - ・ 品種については、「男爵薯」、「メイクイン」にこだわっていないが、売り場を考えると一定のロットが確保できる品種が必要となる。

- 生産者団体
 - ・ 当地域では、シストセンチュウ抵抗性品種の導入・普及率が36%となっており、品種としては、「きたひめ」が多く、「さやか」、「ひかる」など、加工用がメインとなっている。
 - ・ 「きたひめ」の導入は、シストセンチュウの発生によることと、加工用の新品種を入れるために進めてきたもの。
 - ・ 新品種は、消費者サイドを意識して導入している。
 - ・ シストセンチュウ抵抗性品種は栽培面で癖が多いので、この辺を解消してほしい。
 - ・ シストセンチュウ抵抗性品種は消費者サイドにメリットは少ないが、生産サイドでの農薬の減少等のメリットを伝えていくことも必要。

- 生産者団体
 - ・ 当管内では、シストセンチュウ対策に取り組んできたが、現状では、シストセンチュウ抵抗性品種の導入と4年輪作を行うことで、収量はほぼ影響がないまでに回復してきた。
 - ・ シストセンチュウ抵抗性品種の導入で、センチュウ密度は90%程度減少するが、次に感受性の品種を入れると元に戻ることになるので、他の作物と輪作しつつ抵抗性品種を導入している。
 - ・ 管内全体では、シストセンチュウ抵抗性品種の導入は25%ほどだが、馬鈴しょがメインの地域では、導入率が低い。
 - ・ 過去から、市場や実需側からの品種評価を確認している中では、「男爵薯」が求められている。
 - ・ シストセンチュウの発生度合いを考えると、生産性が高いのはシストセンチュウ抵抗性品種であるが、販売としては「男爵薯」となる。農家はシストセンチュウ抵抗性品種を作りたいが、販売のことを考えると、結果、「男爵薯」を作ることになる。
 - ・ 新品種の育種に頑張ってもらいたい、最終的には、加工適性や汎用性など、求められるものが色々ある。トータル的に評価を満たすような品種があればと思う。

- 生産者団体
 - ・ 地域内で種馬鈴しょを生産してもらうことが基本となるが、シストセンチュウの関係で、地域をまたいでの種子生産とならざるを得ない状況。生食用、加工用、で

ん粉原料用と、地域では種馬鈴しょの確保に苦戦している状況。

- 種馬鈴しょの生産者戸数は毎年減少し、一戸当たりの面積が拡大し、無理がかかる面積となってきた。
- 馬鈴しょの増殖率は10倍前後を見込んでいるが、他品目と比べ増殖率が低く、一気に増やすことができないことから、種馬鈴しょを簡単には作ることができない。
- シストセンチュウ抵抗性品種についてはPR不足の面がある。
- 種馬鈴しょの販売面で、産地、消費者に求められているものを供給できるように対応していきたい。

北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会（でん粉用）の結果概要

- 1 日 時：平成24年5月25日（金）14：50～15：45
- 2 場 所：北海道大学学術交流館第1会議室
- 3 意見交換（主な発言内容）

○ 生産者団体

- ・ でん粉の需給は、ここ数年、でん粉原料用馬鈴しょの作付面積の減少と不作が重なり、供給量が平成19年産の24万トンから23年産で17万トンに激減し、でん粉ユーザーに対しては、割当販売をせざるを得ない状況となっている。
- ・ でん粉ユーザーにとって、原料がないことは死活問題であり、足りない分は輸入に切り替わることとなる。
- ・ 品質については数年前までユーザーから求められていたが、現在は、数量確保を強く求められている。品質より量となっている。
- ・ でん粉の生産量を回復していくためには、何らかの対策が必要で、シストセンチュウ抵抗性品種を100%導入することが理想。
- ・ シストセンチュウ発生ほ場が拡大してくると、種馬鈴しょを生産するためのほ場が限定されてくる。
- ・ 品種開発機関へのお願いとして、シストセンチュウ抵抗性の付与は必須条件だが、現在でん粉用で主流となっている「コナフブキ」並みの収量や早掘りしたときの収量の確保に加え、労働性の観点から防除回数を減らせる疫病抵抗性品種の開発が重要。
- ・ でん粉原料用馬鈴しょは、収益性と労働性のバランスが重要で、収益性はここ数年上がってきていると思うが、労働性をどう軽減していくか。そのためにもシストセンチュウ抵抗性品種の導入が必要。
- ・ でん粉用におけるシストセンチュウ抵抗性品種は、1に収量性、2に早掘り特性、3に疫病抵抗性が大事。

○ 生産者団体

- ・ 当地域は、既に60%がシストセンチュウ発生ほ場で、抵抗性品種の導入率は30%。
- ・ でん粉原料用品種で、シストセンチュウ抵抗性品種の導入は難しくない。収量性があつて、採算が良ければ切り替わる。
- ・ シストセンチュウ抵抗性品種は晩生が多く、収穫が後半のものが多いため、輪作の維持が難しい。早生の品種がほしい。
- ・ シストセンチュウ抵抗性品種の導入割合が30%にとどまっている理由は、種馬鈴しょ不足と、収量の増減幅が大きいことから、農家に根付かない。
- ・ 各農家が自分の好きな、作りたい品種を生産している状況。
- ・ 収量性の高い品種の開発を望む。

○ 試験研究機関

- ・ 「コナフブキ」は他の品種と違う性質があり、通常は肥料をやりすぎると収量は上がるがでん粉価が下がるので、でん粉収量としてみるとデメリットとなるのだが、「コナフブキ」は比較的でん粉価が下がりにくい。倒伏した場合でも、他品種に比べ減収程度が小さい。
- ・ 早い段階からいもの肥大が進み、早掘りでもそれなりに収量がある。生産者にとって作りやすい品種。
- ・ 「コナフブキ」のような特性を持った品種を作ることは、なかなか難しい。

○ 試験研究機関

- ・ 当方のでん粉原料用品種の開発再開は最近からで、今後取り組んで行きたい。

○ 生産者団体

- ・ 数年前から農家はシストセンチュウによる減収を実感している状況。
- ・ 生産者の意識を変える対策を実施している。
- ・ でん粉の供給責任を果たすことが大事。
- ・ 既存の抵抗性品種を組み込んで国産でん粉の市場を守っていくことが大事であり、各地域でまちまちな対応では意識の統一等ができないので、そのための全道ルールが必要。
- ・ 当地域では、シストセンチュウの発生割合が3割あり、シストセンチュウ抵抗性品種の面積維持も大変な状況だが、近未来の姿を生産者に理解させることが重要。

○ 試験研究機関

- ・ 「アーリースターチ」、「ナツフブキ」は「コナフブキ」より早生の品種で、早掘りではそこそこの収量だが、最後までいくと「コナフブキ」には収量でかなわないことが置き換わらない理由。
- ・ 「サクラフブキ」は多収だが、晩生で早掘りをすると翌年の種子の貯蔵性に問題がある。
- ・ 「アスタルテ」は極晩生で小粒で野良いものになりやすい。
- ・ 現行のシストセンチュウ抵抗性品種は「コナフブキ」に比べてそれぞれ一長一短があり、総合的に勘案すると「コナフブキ」に置き換わるものがない。
- ・ 「コナユキ」は、「コナフブキ」と同じ中晩生で、ほぼ同じくらいの収量性であるが、欠点もある。現在、関係団体等にご協力いただきながら、栽培法で改善できないか試験中であるので、新しい品種が出回るまでの対応として上手く使っていただきたい。
- ・ 馬鈴しょについては、地域によっても生育反応もまちまちであるので、統一的な指導対策がなかなかできないが、これからは、きちんとやっけて行かなければならない。

○ 関係機関

- ・ 新品種が出てくるときにどのくらいの種馬鈴しょ需要があるのか、なかなか情報が入ってこない。
- ・ 最初から、地域の種馬鈴しょ需要計画があれば、原原種を大量に出すことはできるので、その情報を早く頂きたい。
- ・ 原種から採種段階を飛ばして一般ほに出すことは好ましくないが、基本となる三段階増殖を実施しながら、早期普及のため余剰となる種子の配布などの対応は可能なのではないか。

○ 生産者団体

- ・ 品種が増えて、去年は原原種として生産される品種数は 54 に増えているが、仮に種苗管理センターにお願いすれば、大量に原原種を作れるほ場があるということなのか。基本の（種馬鈴しょの増殖の）流れと異なり、段階を飛ばすことができることになれば、新品種普及のスタートダッシュができるのではないか。

○ 生産者団体

- ・ 試験用の種子が手に入り難く、大規模で試験栽培ができない。

○ 試験研究機関

- ・ 品種開発機関等で協議した結果、品種化された後に、最大3ヘクタール分の試験栽培用の種子を作れるようにしている。